

橋梁の渦励振の3次元応答解析と風洞実験

(株)ニチゾウテック 正員 南條正洋 関西電力(株) 正員 小笠原正治
 日立造船(株) 正員 山村信道 (株)ニチゾウテック 正員 畠中章秀

1. まえがき

渦励振による応答は、一般に風洞実験で検討されるが、2次元模型と3次元模型とで応答の相違がある。特に、解析上では、共振状態での励振力の空間相関が不明確である。以下には、これらの難点に対応する一手法として、空間修正関数を考慮した3次元応答解析と風洞実験の結果を報告する。

2. 渦励振の応答解式

3次元（骨組）構造系の渦励振に対する運動方程式を、次式で表す。

$$X_n''(t) + 2\tilde{h}_n \cdot \tilde{\omega}_n \cdot X_n'(t) + \tilde{\omega}_n^2 \cdot X_n(t) = \{\phi_{in}\}^T \cdot \{F_i(t)\} / M_n^* \quad \dots (1)$$

ここに、 $X_n(t)$ ：基準座標、 \tilde{h}_n ：有風時（構造+空力）の減衰定数¹⁾、 $\tilde{\omega}_n$ ：有風時の角速度¹⁾、 ϕ_{in} ：モード縦距、 $F_i(t)$ ：渦励振力（自励空気力を含む）、 $M_n^* = \{\phi_{in}\}^T \cdot [M] \cdot \{\phi_{in}\}$ 、 $[M]$ ：質量行列

である。 \tilde{h}_n は励振方向の非定常空気力係数を除いた値とする。渦励振力 $\{F_i(t)\}$ は、Scanlan²⁾らの非線型モデルに準じて、揚力成分 $L_i(t)$ 、モーメント成分 $M_i(t)$ を次式のように表す（水平部材の場合）。

$$\left. \begin{aligned} L_i(t) &= (\rho \cdot V_i^2 / 2) \cdot B_i \cdot K_{in} \cdot H_{ni}^* \cdot \{1 - \xi_i^2 \cdot y_i(t)^2 / B_i^2\} \cdot \{y_i'(t) / V_i\} \cdot L_i \\ M_i(t) &= (\rho \cdot V_i^2 / 2) \cdot B_i^2 \cdot K_{in} \cdot A_{vi}^* \cdot \{1 - \eta_i^2 \cdot \alpha_i(t)^2\} \cdot \{B_i \cdot \alpha_i(t) / V_i\} \cdot L_i \end{aligned} \right\} \quad \dots (2)$$

ここに、 ρ ：空気密度、 V_i ：風速、 B_i ：気流方向の部材幅、 $K_{in} = B_i \cdot \tilde{\omega}_n / V_i$ ：無次元振動数、 $H_{ni}^* \cdot A_{vi}^*$ ：揚力・モーメントの励振力係数、 ξ_i 、 η_i ：非線型応答係数、 $y_i(t)$ 、 $\alpha_i(t)$ ：鉛直・ねじれ変位

である。基準座標 X_{0n} は、1周期($T=2\pi/\tilde{\omega}_n$)内の励振エネルギーと減衰エネルギーを等置して得られる。ここで、共振状態での $\{F_i(t)\}$ の空間修正関数を $J_{ij}^2(\tilde{f}_n)$ ³⁾とすれば、

$$\left. \begin{aligned} R_{1i} &= 4B_i^2 \cdot H_{vi}^* \cdot (\phi_{in}^y)^2 \cdot L_i, \quad R_{2i} = H_{vi}^* \cdot \xi_i^2 \cdot (\phi_{in}^y)^4 \cdot L_i \quad (\text{鉛直励振時}) \\ R_{1i} &= 4B_i^4 \cdot A_{vi}^* \cdot (\phi_{in}^a)^2 \cdot L_i, \quad R_{2i} = B_i^4 \cdot A_{vi}^* \cdot \eta_i^2 \cdot (\phi_{in}^a)^4 \cdot L_i \quad (\text{ねじれ励振時}) \end{aligned} \right\} \quad \dots (3)$$

$$A = \sum_i \sum_j J_{ij}^2(\tilde{f}_n) \cdot R_{2i} \cdot R_{2j}, \quad B = \sum_i \sum_j J_{ij}^2(\tilde{f}_n) \cdot (R_{1i} \cdot R_{2j} + R_{2i} \cdot R_{1j}), \quad C = \sum_i \sum_j J_{ij}^2(\tilde{f}_n) \cdot R_{1i} \cdot R_{1j} - (16 \tilde{h}_n \cdot M_n^* / \rho)^2 \quad \dots (4)$$

$$A \cdot X_{0n}^4 - B \cdot X_{0n}^2 + C = 0, \quad X_{0n}^2 = [B - (B^2 - 4A \cdot C)^{1/2}] / (2A) \quad \dots (5)$$

である。式中の $H_{vi}^* \cdot A_{vi}^* \cdot \xi_i$ 、 η_i は、2次元模型の構造減衰定数 h_1 、 h_2 に対応する同風速($=V$)時の振幅を $X_{01} \cdot X_{02}$ 、角速度を $\tilde{\omega}_1$ 、 $\tilde{\omega}_2$ とし、無風時の角速度を ω_y （鉛直）・ ω_a （ねじれ）とすれば、次式の値となる。

$$H_{vi}^* = \frac{4m \cdot \{h_1^y \cdot (\omega_y / \tilde{\omega}_1) - h_2^y \cdot (\omega_y / \tilde{\omega}_2) \cdot (X_{01}^y / X_{02}^y)^2\}}{J(\tilde{f}) \cdot \rho \cdot B^2 \cdot \{1 - (X_{01}^y / X_{02}^y)^2\}}, \quad A_{vi}^* = \frac{4I_p \cdot \{h_1^a \cdot (\omega_a / \tilde{\omega}_1) - h_2^a \cdot (\omega_a / \tilde{\omega}_2) \cdot (X_{01}^a / X_{02}^a)^2\}}{J(\tilde{f}) \cdot \rho \cdot B^4 \cdot \{1 - (X_{01}^a / X_{02}^a)^2\}} \quad \dots (6)$$

$$\xi = (2B / X_{01}^y) \cdot \left[1 - \frac{4m \cdot h_1^y \cdot (\omega_y / \tilde{\omega}_1)}{J(\tilde{f}) \cdot \rho \cdot B^2 \cdot H_{vi}^*} \right]^{1/2}, \quad \eta = (2 / X_{01}^a) \cdot \left[1 - \frac{4I_p \cdot h_1^a \cdot (\omega_a / \tilde{\omega}_1)}{J(\tilde{f}) \cdot \rho \cdot B^4 \cdot A_{vi}^*} \right]^{1/2} \quad \dots (7)$$

ここに、 m ：2次元模型の質量分布、 I_p ：極慣性モーメント（単位長）、 B ：気流方向の幅、 $\tilde{f} = (\tilde{\omega}_1 + \tilde{\omega}_2) / 4\pi$ 、 $J(\tilde{f})$ ：模型の空間修正関数

以上の諸式は水平部材の渦励振を示すが、座標変換により、その他の場合も同様に定式化される。

3. 応答解と実験値の比較

図-1の斜張橋をモデルとして、2次元模型(2D:1/25)と3次元模型(3D:1/85)の一様流、および、乱流($I_u = 6\sim7\%$: $I_w / I_u = 0.85\sim1$)による主桁の渦励振の振幅を計測した。図-2に、模型が振動時・静止状態での

後流の相互相関係数を示す。図示の k 値は空間修正係数 (decay factor) であり、 $R(\Delta L, 0)/R(0, 0) \approx \sqrt{Coh}$ と仮定して計測値から逆算した値である。図-3に、2次元模型のV-A曲線を示す。応答解析の結果と2次元模型による実橋振幅の予測値（質量減衰パラメータ： $M_{eq} \cdot h / (\rho \cdot D^3)$ 、または、 $I_{eq} \cdot h / (\rho \cdot D^4)$ による補間値）、および、3次元模型の予測値（実橋換算： M_n^* の比で補正した値）を表-1に比較する。

4.まとめ

空間修正関数を加えた渦励振の応答解析により、一様流・乱流の場合とも、3次元模型とよく一致する結果を得た。2次元模型による振幅の予測値は、概して過大である。渦励振時の空間修正係数 k は、自然風に対するガスト応答の場合などより、はるかに小さい。

参考文献：1) Tanaka, Yamamura and Shiraishi : Multi-Mode Flutter Analysis and Two & Three Dimensional Model Tests on Bridges with Non-Analogous Modal Shapes. Jour. SME, JSCE, 471/I-24 2) Simiu and Scanlan : Wind Effects on Structures. John Wiley, 1978 3) 田中・山村・南條他：長大斜張橋（架設系）のガスト応答解析と3次元模型試験。土木学会他・構造工学論文集, 37A, 1991

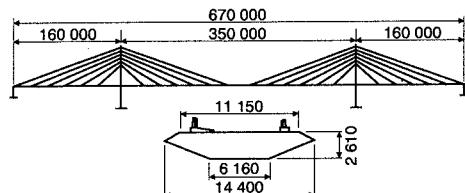
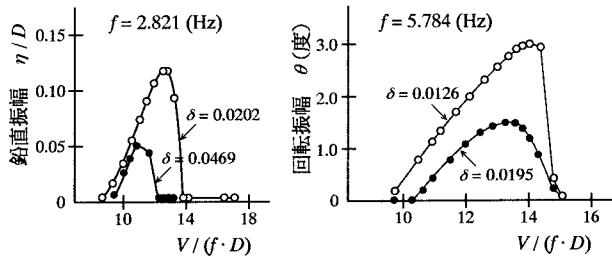


図-1 斜張橋の諸元



(a) 一様流

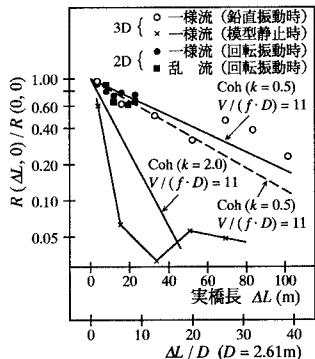


図-2 後流（変動成分）の相互相関係数

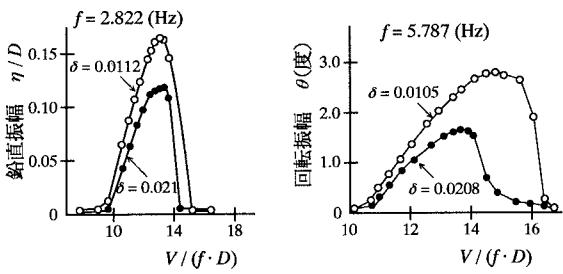


図-3 渦励振による2次元模型の振幅

表-1 渦励振による最大応答振幅の比較

気流状態	一様流 ($k = 0.5$)			乱流 ($I_u = 6\sim7\% \cdot k = 0.6$)		
	振動モード	鉛直 (Sym. 1)	鉛直 (Asym. 1)	ねじれ (Sym. 1)	鉛直 (Sym. 1)	鉛直 (Asym. 1)
振幅の着目点	($L/2$)点	($L/4$)点	($L/2$)点	($L/2$)点	($L/4$)点	($L/2$)点
実橋振動数 f (Hz)	0.3204 0.0219	0.4355 0.0216	1.7368 0.0131	0.3204 0.0217	0.4355 0.0168	1.7368 0.0135
応答解	最大振幅 (m, 度) 発生風速 (m/s)	0.224 10.60	0.129 12.60	1.134 60.00	0.076 10.40	発生せず 1.749 60.80
2次元模型	最大振幅 (m, 度) 発生風速 (m/s)	0.296 10.46	0.282 14.21	3.042 64.10	0.332 11.29	0.371 15.34
3次元模型	最大振幅 (m, 度) 発生風速 (m/s)	0.234 9.73	0.141 13.00	1.003 62.34	0.055 9.74	発生せず 1.044 64.36

(注) 2D: 格子乱流, 3D: 境界層乱流, $I_w/I_u = 0.85\sim1$